

「仕事ができる社員、できない社員」という本からです
情報収集に熱心な人 いい話も、悪い話も耳に入ってきているか？

先にも述べましたが、会社や、社員にとって重要なキーワードは「徹底度」です。仕事は徹底度で決まります。仕事をしていて、目についたこと、気がついたこと、気にかかったもの、他人に依頼してあること、手元にある仕事の山、以前起こった問題に対する再発防止策など、とにかくありとあらゆることに徹底して手を打つのです。これは無条件に必要なことです。一つでも放っておけば、どこかしらにまずいことが起こります。また、それぞれの仕事に対する「処理レベル」は、その人の持つ一定レベルを常に維持することが肝心です。そして、「処理レベル」が一定であれば、仕事の出来を左右するのは「処理スピード」です。仕事の善し悪しは、スピードをいかにアップし、いかに多くの仕事を処理するかにかかってきます。

できるだけ多くの仕事に取り組むためには、いくつかのポイントがあります。もし時間に余裕がないのなら、「緊急度」に合わせて仕事を処理していきます。明日までの「デッドライン」がついている 500 円の仕事と、締め切りが一週間先である 500 万円の仕事であれば、500 万円の仕事より、500 円の仕事を優先するのです。「重要度」ではなく「緊急度」によって物事の順番を決めるのが基本です。もし時間の余裕があるなら、前倒して次々に仕事を処理してきます。どんどん前倒して、すべての懸案事項に手をつけるのが理想です。その中には、当然ですが、「情報収集」も入っています。情報収集を怠るなど、あってはならないことです。そして、やるべき情報収集は徹底的にやらなければいけません。たとえば、2000 年代の前半、トリンプの

社長を務めていた時代、私は雑誌で得た情報をもとに何億円もの損害を被るのを免れたことがありました。当時は、大手百貨店やスーパーが次々に経営破綻に追い込まれていました。その煽りを食って繊維産業も大打撃を受け、億単位の損失を出す企業も少なくなかったのです。しかし、トリンプはその危機を免れました。なぜなら、そうした事態を予期し、ある週刊誌で得た情報を活用して「倒産対策」を打ってあったからです。トリンプは、取引先の倒産による貸し倒れ損失を防ぐ「取引信用保険」という、その当時まだよく知られていなかった保険に加入していたことで、1 円の損も出さずに済みました。

情報収集を怠らず、現場の中において神経をとがらせていけば、「変化の兆候」に気づくことができます。そして、必要な情報が適宜入ってくるように、いわゆるアンテナを張っておけば、時間的な余裕を持ってリスクを取らずに対策を練ることができるのです。だから仕事ができる社員は、常に情報のアンテナを張っています。先の例にしてもそうです。繊維業界で取引信用保険に加入していたのは、トリンプだけでした。当時は、損失を出さなかったことで方々から事情を聞かれたものです。種明かしをすれば「雑誌で見た」というだけのことで、先を予測することはそれほど難しいことではなかったと、私は思っています。もっとも、この保険は年間数千万円の保険料がかかります。その代わりに、取引先が倒産すれば何億もの保険金が入ってくるわけです。もしかしたら当時、「次々と倒産しそうだ」「取引信用保険という保険がある」という情報を持っていた経営者はいたかもしれません。けれど、知っているだけで終わってしまえば、せっかくの情報も意味をなさなくなってしまいます。「年間数千万円を支払って加入する」という判断があって初めて、情報は活用されたことになるのです。徹底的に情報を集めた後は徹底的に実行するのです。中途半端に終われば、結果的には情報収集をしないのと同じことになります。情報収集もやるなら徹底的にやるのが、仕事ができる人であるはずなのです。

情報収集を怠らず、現場の中において神経をとがらせていけば、何に気づくと言っていますか？

()